

「祖父の伝えてくれたこと」 大木敦子

私の実家で同居していた父方の祖父は大阪の出身で、若い頃絵描きになりたかった。東京の美術学校に入りたいと上京したが、3日で親に連れ戻されたという。絵を描く夢は諦めきれなかったらしく、父が小さい頃は果物屋をしながら、商品の果物の写生をしたり、近所の商店の包装紙のデザインをしていた。その後祖父は妻子を連れて上京し、会社を興し、家族の生活を軌道に乗せた。2人の息子を大学まで出した後、息子である叔父に会社を任せ、祖父は毎日絵や字を書いていた。外出時にはベレー帽を被り、いかにも「画家」という雰囲気を出していた。祖父は子どもだった私にいろいろ楽しいことを教えてくれた。夏には私達を椿山荘のバーベキューに連れて行ってくれた。目の前の鉄板でお肉や野菜が焼き上がるのを小さかった私は大きな紙のエプロンをして、わくわくしながら待った。また船を借り切り、私達と叔父一家を東京湾のハゼ釣りに連れて行ってくれた。七夕には祖父は色とりどりの和紙で七夕飾りや短冊を一緒に作ってくれ、庭の竹を切って、飾ってくれた。祖父の部屋には和紙や千代紙などのストックが山ほどあって使いたい時にはその中から分けてくれた。祖父はいろいろなイベントで家族を楽しませるのが好きだった。祖父は私が24歳の時に亡くなった。私が結婚する前に亡くなったので、私の2人の息子達は私の祖父とは接点がない。ところが次男が中学3年の時、急に「美術の道に進みたい」と言い出した。次男は特徴のある絵を描いてはいたが、絵が特別うまい訳でもなかったし、絵に興味があるとは知らなかった。ちょっと驚いたが、主人も私も次男を応援した。次男は高校時代3年間、美大のための予備校に通い、デザインの道を目指していたが、浪人中に「絵で表現するより芸術学(美術)の勉強をしたい」と進路変更して、結局「東京の美術学校」に入学した。

私は20年程前にある刺繍作家の先生の作品に出会い、その素敵な作品に魅せられいつか習いたいと思った。次男が美術の道を目指し始めて2年位経った頃、私もその先生のお教室に通い始め、今年でかれこれ10年になる。色とりどりの糸で作品を作り上げていくのはとてもわくわくする作業である。刺繍は絵画とは違うが、色とりどりの糸で織りなす作品は絵画に通じる。私にとって刺繍は生涯ずっと楽しめるものになるだろう。

私は、私や次男の中に祖父の美術への思いが流れているのを感じる。そして祖父はそんな私達を喜んで見守ってくれているような気がしている。これからも祖父が伝えてくれた「物を制作し、表現する楽しさ、そして生活を楽しむこと」を大切にしていきたいし、次世代に伝えて行きたいと思っている。次回は五藤美枝子さんをお願いします。

「韓国濟州島満開の桜とトレッキング」

女性ばかりの山の会「紫蘭会」に入って早くも丸6年です。命をかけて登山したいという気持ちはさらさらなく、春は花と新緑、夏は強い日差しでも肌に心地よい木陰の涼風、秋は紅葉と落ち葉を踏みしめる感触と香、こうした楽しみを味わうために時々山歩きをしています。もう少し若ければアルプスにも行けたと思いますが、この年で膝の不調をかかえているので無理はできません。それでも一緒に歩く先輩方から「小山田さんは強いね」と言われますと、もう少し早くこの会と出会いたかったと思います。今は高い山はその雄姿を眺めるだけで満足と思っています。

私の人生で海外の山を歩くななんて想像すらできなかったのですが、今までニューカレドニア、台湾、中国そして今回の韓国と現実的に山を歩いてきました。

国内旅行と同じ感覚で行かれる韓国ですが、私は初体験でした。今春日本は不順な気候続きで開花が遅れていましたので、あまり期待もせずに行ったのですが、これが見事なのです。最初に行った濟州島は桜が満開でちょうどさくら祭りも開催されていました。桜のトンネルがどこまでも続き、それが1か所ではなく、いたるところ桜・さくら・サクラ……。それはそれは美しい景色で、しかもまだまだ若木を植えて整備が続き、いかに桜を大切にす国が実感させられました。次に行った慶州も全く同じ光景でした。桜は日本を代表する世界に誇れる花のはずが「日本は負けた!」正直そう思いました。桜のほかにもたくさんの色とりどりの春の花々が迎えてくれました。

濟州島の真ん中に位置するのが、有名な漢拏山で最も高いところは1950mですが、私たちが歩いたコースの頂上は1725mで、その先の道は目下10年間のお休み中で通行禁止になっていました。自然を守るために順番に通行禁止の措置がとられると聞いてこれもまた自然保護の進んだ考え方だと感心しました。晴天でしたが、高いところはまだまだ残雪が多く、細い雪道をバランスをとりながら歩いたり、強風に吹かれながらロープを必死に掴んで歩いたり、可憐な花の写真をとったり変化に富んだ山歩きを堪能した1日でした。

慶州は日本でいえば京都・奈良に匹敵するところですが、ここでも南山に登ってきました。「えっ!ここを登るの??」ロープも鎖もない岩場をわずかなひっかかりを見つけて手でつかみ足を乗せ必死です。幸い表面がザラザラで固い岩だったので、教えてもらいながら登りましたが、私にとってはかなりの挑戦でした。80代の2人も無事クリア。行ってみなければわからない道でした。

有名な垢すりとエステの体験もしてきました。